

帯広畜産大学（2019年リーグ戦5位）

緑に囲まれた帯広市稲田町の帯広畜産大キャンパス。日中の最高気温が30.1度の猛暑となった8月1日、土曜日。芝生がまぶしいグラウンドで、アメリカンフットボール部のOL三上雅輝主将（4年）は「道内の大学で唯一の芝の専用グラウンドです」と胸を張った。そして、新型コロナウイルスの影響で、この恵まれた練習場が使えない悔しさをのぞかせた。

昨秋のリーグ戦では1勝3敗1分けの5位に終わった帯広畜産大だが、札幌学院大戦では2点リードで迎えた試合終了53秒前に、痛恨のセーフティを許して同点引き分けに終わるなど、接戦も演じた。一時は逆転となるTDパスを捕球したWR白川天悠（4年）は「勝てる試合を勝ちきれなかった」と振り返り、RB池田海斗（4年）も「上位2校以外は実力差を感じなかった」と手応えを強調した。

去年の悔しさをぶつけるはずの今季だったが、新型コロナウイルス対策で2月28日に道が緊急事態宣言を出すと、帯広畜産大も大学施設を閉鎖し、課外活動も禁止となった。新学期からリモート授業が始まったが、アメフト部は学外での個人練習のみ。2年生以上の部員19人のうち8人の4年生が中心になり、パートごとの合同自主練習を呼びかけた。DBとWRは週2回、キャンパスから車で10分ほどのグリーンパークの芝生広場などでアジリティやフットワークのほかパスインターセプトの練習も行った。RB池田は「この状況を言い訳にはできない。自分たちに必要なものをやるしかない」と後輩たちに訴えた。

一方で三上主将は7月13日、課外活動の解禁を求める嘆願書を大学に提出した。他校のライバルたちが続々と活動を再開する中で、この日から4年生に限って大学への入構と実験と研究活動が解禁されたのに合わせて、アメフト部の活動も解禁するよう求めた。体育会の他クラブも賛同の署名を添えてくれた。「大学側は当初、10月からの活動解禁を予定していたようだが、それでは10月第1週に始まるリーグ戦に参加できなくなる」と三上主将ら部幹部の危機感からだった。

十勝管内で新型コロナウイルスの感染が沈静化していることと、三上主将らの懸命の願いが届き、大学側も8月中旬に解禁を前倒しする検討を始めた。ようやく届いた吉報に三上主将は「8月中旬解禁でも、日本協会が活動再開に向けたガイドラ

インで規定する6週間の準備期間を考えると、ぶっつけ本番のリーグ戦になるかもしれない」と不安を抱えながらも「まずは練習を再開できるのがうれしい。今年は4年生が8人いて戦力も充実している。優勝をあきらめずに頑張りたい」と決意する。

新入生が大学にまだ足を運べない中で、SNSで入部を呼びかけ、1日までに選手1人とマネージャー2人が加わった。着実に動き出した今年のチーム。三上主将は「帯広畜産大は毎年、監督もコーチも実質不在で選手主体のチーム。自分たちの主体性と底力を見せたい」と力を込めた。



【芝生の専用グラウンドで練習再開への決意を語る三上主将（手前）】

